

# 学校

ライフ・ストーリー II

太田昭宏氏へのインタビューをもとに、その人生の記録を編集部で書き起こしました

## 学校

中学校時代に

太田が植えた夏みかんの並木。  
詩人のサトウ・ハチローは  
そこに何を感じたのだろうか。

京都大学での青春。

何ごとも真っ向勝負で  
挑んだ日々に、

今日の太田の原点がある。

## サトウ・ハチローの詩

愛知県のJR豊橋駅。駅前から出発する市電が、市役所前をすぎると、やがて市電通りは、広い街道と交差する。これが青陵街道である。この交差点から、青陵街道沿いに北へ進むと、大人が見上げるほどの常緑樹が、数メートルの間隔で枝を広げている。

青陵中学校時代に、生徒会長だった太田たちの発案でつくった「夏みかん並木」である。

交差点から並木に沿つて十分も歩けば、高台に建つ青陵中学の校舎が見える。まだ植えてから年月が浅い背の低い木もあり、昭和三十年代から今日まで続く、當々とした伝統を感じさせる。

青陵中学校のホームページによれば、現在、夏みかんの木は百一本。昭和三十六年に、生徒たちの手で三十八本の苗木が植えられ、郷土緑化の運動がスタートした。毎年の摘果作業の時期になると、生徒が夏みかんをもぎ、全校生徒に配っている。ボランティア活動として、老人ホームに届けることもある。

夏みかん並木



梶田氏との対談で語られているように、生徒会長だった太田が在学中に植えたものである。より正確にいえば、太田の代では、市役所と掛け合い、苗木を植える穴を掘り下げたところまでだつた。作業が、ちょうど冬場で、夏みかんを植える季節に適していなかつたため、最初の植樹は次の学年にゆずつていて。

この青陵街道沿いに、詩人で、童謡作家でもあつたサトウ・ハチローさん（一九〇三～一九七三）の詩が掲示されている。

現在の掲示板は、平成元年にできたもので、太田も通学した東田小学校の脇に、街道に向かつて設置されている。前文では、昭和四十三年に夏みかん並木のことをテレビ報道で知つたサトウ・ハチローさんが、強く心を動かされ、詩を寄せた経緯が記されている。いかにもサトウ・ハチローさんらしい、やさしく平易な表現の中に、子どもと自然への温かな愛情が伝わつてくる詩である。

詩の内容は次のようなものである。

『きいろがきいろが輝きになる』

サトウ・ハチロー

夏みかんの並木道

思つただけでもたのしくなる

きいろいで、こぼ、坊主の夏みかん

葉がぐれにそれが見える

づらりとそれがならんでいる

晴れた日には青空が見ている

そよ風がゆつたりときいろをゆする

こまかい雨の日には

雨がその実をぬらす

きいろが生きかえったきいろになる



夏みかん並木の掲示板

・  
・  
・  
・  
・

実もうれしいし花もかわいい  
その並木が町にやさしさと  
のどかさと美しさを漂わせる  
少年少女たちが胸に描いたのはこれだ  
だから並木づくりに精をだしているのだ

このくわだては愛から出発している

町を愛する心

みどりを愛するきもち

すがすがしさを愛するものが

一つになつての並木道づくりになるのだ



今年の摘果作業の風景

## 大久保先生との出会い

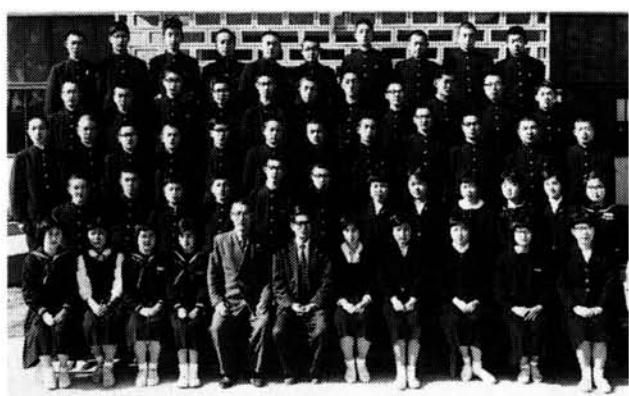
昭和三十六年四月、太田は東海の名門、愛知県立時習館高校に進学した。

学校名は、論語の「學んで時にこれを習う」に由来し、藩校時代にまでさかのばれば、江戸時代からの歴史がある。

この学校で、太田の人間形成に、大きな影響を与える人物との出会いがあった。社会科の担当で、一年時の担任でもあった大久保先生である。東京大学を卒業後、一時、実業家として働いていた異彩の経歴の持ち主だった。

実際に型破りな授業だった。伝統ある名門校に入り、いつたいどんな授業が始まるか待ち受けている新入生に対して喝破(かつぱ)した。

「勉強ばかりしていたら、ろくな人間にならない。いいか、君たちにとつて受験よりも、人のために尽くす生き方が大事なんだ。私は実際に社会で働いていたから、学校の勉強よりも何が大切か、よく分かるんだ」



大久保先生（前列左から五人目）、太田（最後列右から四人目）

太田は、いきなり、あざやかな平手打ちをくらつたような思いがした。教科書の中だけでは分からぬ未知の世界の香りが、大久保先生の背後にはぶんぶんしていた。少し毒氣のある刺激が、またたまらなかつた。

大久保先生の口ぐせは、「人間とは」「人生とは」。教室でも、教科書そつちのけである。人生談義を熱っぽく語り出したら、止まらなかつた。昭和の教員というよりも、挑発力に富んだ幕末の啓蒙家のようなどころがあつた。

「よし、勉強なんか、もうやめた。これからは人間修養だ」

大久保先生にほれ込んだ太田は、学校が終わると、満足に復習もせず、先生の自宅に入りびたるようになつてしまつた。

太田の年齢は十六歳。まさに青春まつさかりである。自宅で会合を開く創価学会員の会話に触発され、人生や哲学について、急速に考え始めた年ごろでもあつた。

いつしか太田自身も「人間とは」「人生とは」が口ぐせになり、哲学書や人生書のたぐいに興味を抱くようになった。これは、口マン

高校一年生の遠足にて



チストで理想主義的な父・鏡平から受けついだ血が、大久保先生との出会いによつて、とたんに騒ぎ出したのかも知れない。

こうして一年がすぎた。成績は正直である。優等生で入学した太田の成績はかなりダウンしていた。ロマンの世界に傾きすぎ、バランスをくずしていた高校生活だったが、ここで体勢を立て直す力となつたのは、母・春子からゆずり受けた現実重視の感覚ではなかつただろうか。

「いかん、いかん、このままでは大変なことになる」。太田は、二年生から軌道を修正して、人生論を語るばかりでなく、勉学にも打ち込んでいった。いずれにせよ、大久保先生とめぐりあつたことは、「何のために学ぶのか」「人に尽くす生き方とは何か」を常に問いかけて生きていく契機となつたのである。

こうして貴重な出会いを刻んだ高校の三年間が終わり、太田は京都大学工学部へ進学した。

## 京大相撲部の土俵へ

京都の町は、桜の季節を迎え、鴨川の上流から、桜の花びらが群れをなし、筏（いかだ）のように流れていた。

昭和三十九年春。京大一回生の太田は、軽音楽部に入部するつもりで、部室をのぞきに行つた。まだお目当てのサックス練習が始まつていなかつたため、時間をもてあましていた。

もし、この時、サックスのレッスンが行われていたら、太田の青春期と人生は、別の道をたどつていたかも知れない。

たまたま目の前に、太い柱で組んだやぐらがあり、その下には丸い土俵が広がっていた。突然、背後から声をかけられた。相撲部の上級生である。

「なかなか、いい体をしているね。一度、土俵に上がつて取り組みをしてみないか」

太田は、やんわり断つたが「まわしをつけるなんて、一生に一度のことかもしれない。いい記念になるよ」というセリフに、「それも

当時の京都大学時計台



「そうだ」と、つい納得してしまった。

初めてまわしをつけてみると、少し照れくさかつたが、どこか体の奥がひきしまるような爽快さもあった。色白で、均整のとれた体に、なかなかまわしが似合っていた。

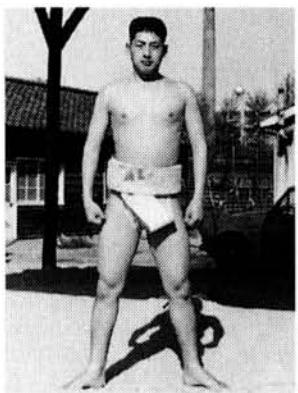
土俵の土を踏みしめ、思い切って上級生にぶつかってみた。相手は熱戦の末に、土俵を割り、頭をかきながら「参ったよ。君は強いじゃないか。たいしたものだ。すごい」。称賛の嵐である。

さかんに持ち上げられると、まんざらでもない。根は単純なところがあり、なにしろ父親の鏡平も、勧誘や押し売りに弱かつた。すっかりその気になり、入部することになった。

わざと負けてヨイショする上級生の手口に、まんまと引っかかるてしまつたのである。

入部後に分かつたことだが、京大の相撲部は、文武両道の優秀な学生が集まっていた。当時も、理学部の首席や、国家公務員試験を全国二位で通りながら、大学院に残っている先輩もいた。太田は、

二回生の五月頃。マワシには血の跡



知勇兼備の猛者たちとウマが合い、厳しい稽古も重ねて、次第に頭角を現していった。

得意技は正面からの、ぶちかまし。一、三発、突っぱつて、ハズにかかる、一気に押す相撲をめざしていた。これが、京大相撲部伝統のスタイルである。正面突破で、決して逃げない。まさに真っ向勝負。正攻法の相撲である。

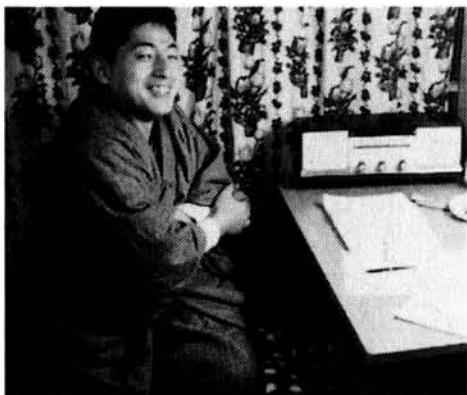
いつも頭からぶつかっていくため、太田のまわしは血で赤黒く染まっていることが多かつた。

### 真っ向勝負の青春

色づいていたモミジとイチヨウがすっかり葉を落とすと、あれほど古都にあふれていた観光客の姿も急に少なくなり、京都はその静けさを取り戻そうとしていた。

温暖な三河地方で育った太田には、初めて迎える京都の冬は、や

真冬の下宿にて



はり冷え込みが強く感じられた。京大の門をくぐつてから、すでに八ヵ月余。十一月の全国大会が終わると、相撲部は十二月から練習が休みになる。

きびしい稽古（けいこ）を積んで確かに体は大きくなつたが、ふと気がつけば、あまりにも勉強不足である。特に読書量が足りないようを感じた。

「よし！ 本を読もう。一日一冊の読書に挑戦だ」

思い立つたら、行動も早い。それも相撲と同じ、頭から突っ込んでいく正攻法である。まずは「岩波文庫百冊の本」の読破に照準を合わせた。できるだけ薄い本を選んで読み始め、読書ノートも記していく。最初の一ヶ月間で、三十一冊を読了した。

カバンの中には、いつも二種類の本が入っていた。難しい本と、疲れたときでもサッと読めるやさしい本。そのころの服装はバンカラ風を気取り、足もとは下駄できめていた。カラソコロソ音を立て、肩で風を切るように構内を闊歩（かつぽ）していたのである。そんな格好で古本屋をめぐり、『三太郎日記』や『出家とその弟子』など

西部食堂にて



を読みふけるのが、いかにも学生らしく楽しみだった。

サルトル、キルケゴール、ドストエフスキイをはじめ、読書のジャンルは哲学、工学、古典、小説と幅広く、在学中に八百冊以上を読破した。

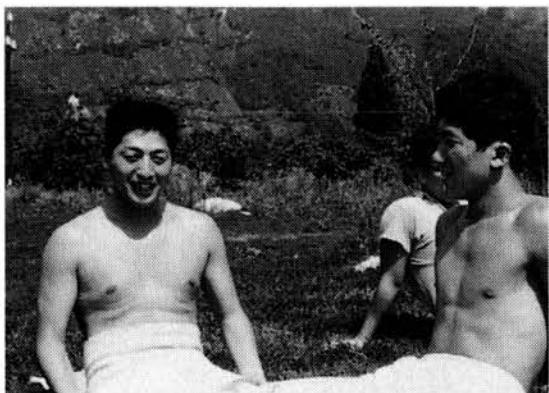
太田は、何ごとも真っ正面からぶつかっていく男である。

ある時、友人に「お前は本ばかり読んでいるが、文化的じゃない」と言られた。力チンときた太田は「よし！ 今日からレコードを聞いてやろう」と決めた。それからは下宿で、毎日五時間ずつクラシックレコードを聴き続けた。シベリウスやボロディンなどを中心に、レコード針がすり減るほど何カ月も鑑賞した。

また進級するにつれ、太田は生命哲学の研究サークルである「宗教思想研究会」の中心者になつていった。京大では、太田の入学前に創価学会の池田大作会長による百六箇抄講義が行われ、同研究会には仏教思想を研さんする息吹がみなぎっていた。

そこで、リーダーになつた太田も仏教思想の造詣（ぞうけい）を

トレーニング



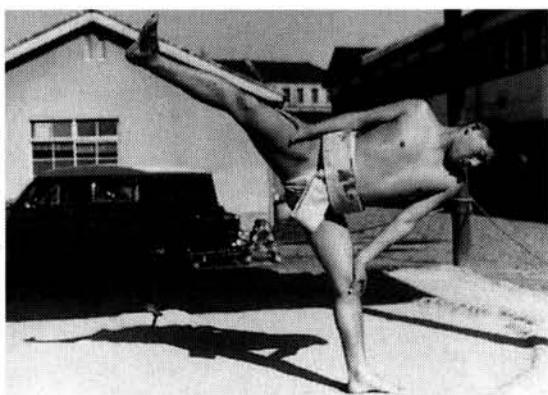
深めるため、深夜零時から明け方の五時まで一ヶ月間、ぶつ通しで勉強した。仏教の理論誌『大白蓮華（だいびやくれんげ）』のバックナンバーを積み上げ、日蓮仏法と法華經の哲学を一気に研さんしたのである。

勉強、読書、運動、趣味、哲学。ここまでの大田の行動パターンをみてみると、いかなる課題に挑戦するときも、徹底的に正面から攻めていく、真っ向勝負である。

確かに太田は、小学校時代から、習字もソロバンも、人の倍の努力を自分に課してきた。どうやら、悩みや苦労が、あまり表に出ないタイプで、一見、秀才肌に見られがちだが、実は意外と不器用な努力型というのが、太田の本当の素顔かも知れない。

## 京都の快男児

何ごとも中途半端にできない太田は、運動部と文化部の両方をや



二回生の五月頃

りぬいた。四回生のときには、「宗教思想研究会」の部長、そして相撲部のキャプテンを兼任するまでになつた。

実り多い学生生活だつた。土木工学科では、地震を研究した。地震の多い日本では耐震工学を学ぶことは、いざれ貴重な財産となり、社会に貢献できるのではないかと考えていた。

また、そのころの京都大学では、ノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹博士も健在で、「きょうは、法経一番教室で、湯川先生の講演があるから、聞きに行こう」といった会話も学生の中で飛びかっていた。知的な刺激に事欠かない環境だつた。

生活は苦しかつたので、多くのアルバイトを経験した。武内氏との対談で語られている小中学校のストーブ設置以外に、道路建設工事の測量、京都のイベントの行列役、ダム工事の建設事務所、家庭教師などである。バイト代は本代に消えることも多かつた。道路の測量は時給がよく、稼ぎの一部は、『三国志』の全巻セットに化けた。家庭教師は一人かけもちすることもあり、試験範囲のヤマをピタリと当て、教え子からは頼りにされた。

---

そのほかには、京都太秦（うずまさ）の撮影所で時代劇のエキストラ。江戸の町を歩く通行人役が主だったが、忍者の役が回ってきたこともある。役者としてスカウトされることを、心秘かに期待していたが、一度も映画会社から声をかけられることはなかつた。

昭和四十年代にはいると、日本中の大学キャンパスには学生があふれ、熱い活気に満ちていた。戦後に生まれた「団塊の世代」が、大学生の年齢にさしかかり、巨大なスクールデントパワーを生み出していたのである。過激な武力闘争に走る勢力もあれば、長髪やジーンズ、フォークソングに代表される若者文化を享受するグループもあつた。

「反社会」「反体制」の旗じるしが独り歩きし、どこか社会や人生に対して批判的に構える生き方が格好いいとされた時代だつた。そんな世相の中で、太田のようにすべてに真っ正面から挑む生き方は、少し古くさく、不格好であつたかもしれないが、一種の爽快さを感じさせる快男児として、周囲の人望は厚かつた。

下宿にて、友人と



本がぎっしり並んだ太田の下宿には、いつも友人が出入りし、人生や社会、将来について語る光景があった。時には一升瓶をかたむけあい、男同士、朝まで語り明かすことも多かった。みんな若く、短い時間でもせんべい布団にくるまつて寝れば、すぐに体力は回復した。

梶田氏との対談の中で、京都は内省的に思索するにふさわしい地であると指摘されているが、まさに人生や社会について、たっぷりと考え、語り尽くす時間を得た太田は、ある意味で大変な幸せ者である。

## 社会と宗教

太田が京都大学に在籍した時代は、ベトナム戦争がしだいに泥沼化していく時期もある。反戦運動、学生運動が華やかなりし時代であり、友人から「ベトナム戦争をどう見るんだ。祈っていたつ

て戦争は終わらない」と問いかけられ、大いに語り合うこともあつた。対話はいつしか「社会と宗教」の問題に行きつくことが多く、この点は太田自身も一学生として、また一信仰者として悩み、思索を重ねていた。

その本との出会いは、何気ない相撲部員の言葉がきっかけだつた。

「太田、顧問の青山先生の本を読まなくちゃだめだよ」

京大相撲部の顧問・青山秀夫先生は、著名なマックス・ウェーバー学者だった。ウェーバーはドイツの社会学者で、代表作に『職業としての政治』などがある。青山先生は名著『マックス・ウェーバー』を著している。

なかでも太田が、心を動かされた書物は、ウェーバー著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』だった。資本主義は決して欲望から生まれたものではなく、神を意識した「エートス」（人間の持続的な性格）が、資本主義の精神になつたことが論じられていた。

社会と宗教について悩んできた胸の奥で、今までどこかで断線していた「思索の回路」に電流が走ったように感じた。

その回路図を示せば、次のようなものだつた。

宗教とは、ストレートに政治に影響を与えるものではない。しかし宗教には、生命のマグマともいうべき、人間の「エートス」に影響をおよぼす力がある。ならば人間の「エートス」の変革が、社会の根源的な変革に連なつていくのではないか――。

顧問の青山先生にも、自分なりの考察の道のりを語り、意見を求めてみた。先生は、太田が信仰をたもつていることを知つたうえで「宗教の実践者が、そのように考えるのは、ごく当然ではないだろうか」と肯定的な見方をしてくれた。

太田の精神世界の中で、はじめて宗教—思想—人間—社会改革が、一本の線になつて、くつきりと結ばれた。

それはやがて、社会をよりよく改革するためには、自分に何ができるのか、という実践面の問い合わせになつていつた。太田が、いよいよ社会に打つて出ていく日が近づいていた――。

## 民衆の中へ

昭和四十五年、太田は将来の進路について、考えあぐねていた。この時期、大学院の修士課程まで進んでいた太田の人生の道は、三つの方角に枝分かれしていた。

第一は、官僚になるコースである。持ち前の努力を重ね、国家公務員の上級試験に合格することができた。

第二は、大企業への就職である。ゼネコン大手の建設会社から採用の内定をとることもできた。

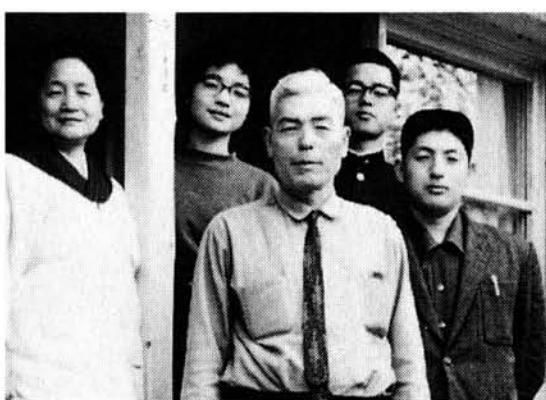
そして第三は、政治の道である。先輩から公明新聞の記者としてやってみないか、という声がかかっていた。

おそらく第一と第二の道は、安定した将来が保証され、地位や経済面でも申し分のない人生になることが予測できた。京大工学部から役人になり、建設省（当時）などで着実に地歩を固めている先輩も多く、大過なくすこせば出世コースを走れるだろう。

建設会社に勤めても、先行きは明るかつた。昭和四十年代の中盤、



京都大学時代、家族と



日本は高度経済成長期のさなかにあり、右肩上がりの経済状況で建設ラッシュも続いていた。巨大プロジェクトに参加するチャンスもあるだろう。男の仕事としては実にやりがいがあった。

それに比べ第三の道は、ある意味では、これまで築き上げたものをゼロに戻してのスタートである。公明党自身、正式に政党として結党されたのは、昭和三十九年。いわば今の言葉でいえば、つい最近まで「新党」だった政党で歴史は浅い。衆参両院で議席を獲得していたが、まだ安定した政治勢力には至っていない。

普通の就職の感覚でいえば、安定した役人か、大企業か、二者択一である。しかし太田は、どうしても公明党に進み、記者として今までの日本になかった大衆政党の理念や実践を読者に伝えていきたかった。

政界は、五五年体制の構図が鮮明で、企業寄りの自民党、労働者側の社会党によつて、自社対立の形で国会は運営されていた。

しかし、反体制を標榜する労働組合も、働く者の代表と名乗りながら、実はエリートであり、日本に本当の意味での大衆政党はなか

つた。まさに公明党は、五五年体制の構造を打ち破り、民衆の中から、民衆の幸福を願つて誕生した政党だつた。

父・鏡平の言葉が、いまも耳に残つていた。

「昭宏、いつか公明が民衆を守る時代が来るんだぞ」

高校時代の恩師・大久保先生の人生論も忘れられなかつた。

「人生とは何か。人間は何のために生まれたのか。人のために尽くさなければ、どんな勉強も本当の意味はない」

そして京大で読みふけつたマックス・ウェーバー。「社会と宗教」のテーマを考えたとき、果たして自分に実践できることは何なのか

これまで出会つた人々や書物が、人生の分岐点に立つた自分にとつて、行くべき方向を示す、道しるべのように思えてならなかつた。太田は、エリート官僚や大企業への道を捨て、公明新聞の記者として、民衆の中で働く道を選択した。